

ラインの城・マルクスブルグ

顧問教授 川手 昭 平

今年度3か月間の在外学術調査研究の機会を与えられて、7月～9月の間、アメリカ及びヨーロッパの諸国を歴訪した。カナダのエドモントンでは、昨年北米大陸カヌー縦断航行隊の諸君がお世話になった方達を訪ねて、お礼を述べるとともに当時のエピソードなどを伺った。8月末、ドイツのミュンヘンに到着して約1か月間ここを基地に西欧各地を巡った。9月半ば、マインツ大学を訪ねた折に、念願のライン河と古城の見学を果たすことができた。

ライン河下りは、マインツを起点にケルンまで約190kmの間を大型観光船が9時間前後で航行している。午前8:45出帆、船中で偶然、先日ローマその他で一緒になった日本人客らと再会し、上甲板で軽食をとり、ラインワインを楽しみながらラインの眺めはそっちのけで談笑、ときどき思い出したように船首デッキに出て、次々と移り変わって行く兩岸の古城や城下町にカメラを向ける。

ラインの流れはこのあたりから片岩の山地をうがって深い峡谷をなし、兩岸に断崖がそそり立つ。しかし川幅がかなり広く水量豊かで、日本のような激流岩をかむといった風情は全く見られない。かの有名なローレライも美女の幻想がなければ、とても航路を誤って暗礁に乗り上げるようなへまはできそうにもない静かな流れである。最上のドイツ国旗の掲揚は如何にもドイツ人らしい。そして兩岸1kmおきに上流からの距離の数字が、横幅数mもある巨大な標識一ぱいに黒々と明示されて

いる。さらに注意してみれば100mおきに小さい標識が立て並べられているではないか。ドイツ人の綿密さに今さらながら驚嘆した。

この険阻な地勢を利用して沿岸領主の城館が数多く建てられている。これらは地形上比較的小規模であるが、それぞれに美しい結構を見せ、かつ堅固不拔である。中世には、いずれもライン河航行の通行税取り立ての関所となっていたが、その殆どが近世フランス軍の再三の侵攻にあって破壊し尽され、廃墟となっているのは残念である。一方、城下町は中世の面影そのままに色とりどりの建物を美しく展開する。

河下りの半ばコブレンツで下船して、ドイツ国鉄線で対岸すぐ南のブラウバッハという町に戻る。この小さな、静かな山合いの町の、高さ150m程の独立した険しい丘の上にマルクスブルグ城が建っている。1100年の建造といわれ、ラインの城の中で破壊をまぬがれた稀有なものの1つである。いよいよ英語が通ぜず、地図1つ売ってもいない。町の中に2,3の城門は見えるが登り口が皆目わからない。何人目かにやっと親切な中年男性がブルグベーク(城への道)に同道してくれる。人1人がやっと通れるような狭い路地に入って、すぐ深い繁みの曲りくねった急坂をあえぎあえぎ登ると、目の前に粗い砂岩造りのいかめしい櫓門がのしかかる。しかし城門は固く閉ざしてはいれぬ。休憩所で待つこと数十分、やっと順番が来て、巨大な鍵を持ったガイドの婦人が重々しく門扉を開けて

くれる。

城門内壁には歴代城主の紋章が飾られている。これをぬけると砲台が数門の砲口をライン河に向けている。ここからは、大きく左に彎曲するライン河の眺めがすばらしい。そそり立つ城壁の下の小道に沿って猫の額程の土地に各種の薬草が植えられている。ふり仰ぐと城内からの張出しに細長い木製の甬が下っている。¹⁴「中世の便所」¹⁵との説明にどっと爆笑がわく。

城内は窄く狭い。後世の豪華な城館とは全く違った実戦即応の山城である。中庭にシンボルの主塔、望楼が聳えるが、展覧の居館との間は一周できの程建込んでいる。ワインの醸造室、ゴシックスタイルの台所等を通してやゝ広い騎士の間、木製調度は簡単であるが、ローソクをリング状に並べたシャンデリアが天井を飾り、天井板にも木彫が見られる。寝室のベッドはかなり小さい。当時

の人の身長 160 cm 程度と合わせてあるとのこと。居館の外壁は実に 3 m 余もある堅牢そのものの構造という。

城名のもとになった 20 m²そこそこのセント・マルクス礼拝堂はゴシック式の丸天井の金箔をおいた宗教画が美しい。別室のギリシャ、ヒッタイト、ローマからはじめて中世に至る戦士、騎士の等身大人形の展示はリアルで面白い。バックに各種の槍や鉞を立並べている。城門に戻る途中の鍛冶部屋は粗面の石壁、アーチのまことに手狭で粗末なものである。

見学を終ってマインツへの列車を待つ間、駅のすぐ下、川沿いの広い公園に出る。成田を流ってすでに 2 か月半、千古の歴史を秘めて溜々と流れる大河、ラインの夕景を前に、初の異国での様々の体験を思いうかべて感無量であった。

(工学部教授)

